

平成25年度日本農林漁業振興会会長賞受賞者受賞理由概要
畜産部門

地元産わら利用を基本とし近隣の住宅団地とも共存する肉用牛一貫経営

- 氏名又は名称 加藤 勝也・加藤 美子
- 所在地 三重県四日市市
- 出品財 経営（肉用牛）

○受賞理由

・地域の概要

四日市市は、三重県北部に位置し、県下最大の人口を擁した都市雇用圏である。経営耕地面積は3,389ha、農業生産は水稻単作が中心であり、畜産部門は肉用牛、酪農、養豚、養鶏経営が行われ、その算出額は約16.3億円（19.5%）となっている。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

昭和62年、夫人の父親の養豚と肉用牛の経営を買い取る形で引き継ぎ、繁殖・肥育一貫の肉用牛経営を開始した。その半年後に牛の病気が蔓延して全頭淘汰を余儀なくされたが、昭和63年には但馬牛54頭を導入し一貫経営を再スタートさせた。この年から近隣の耕種農家とわらと良質堆肥の交換を行い、その収量に応じて繁殖牛を増やしてきた。「おから」の乳酸発酵による飼料化、濃厚飼料と粗飼料の混合給与、戻し堆肥ともみ殻利用による臭気対策、作業の省力化、騒音対策やハエ対策などの創意工夫による低コスト生産と環境対策に取り組み、近隣の住宅団地と共存した経営を行っている。現在は、2人の息子も就農し、繁殖牛310頭、育成牛250頭、肥育牛470頭を飼養し、子牛生産から出荷時まですべて把握した安心かつ安全な牛肉を生産し、プライベートブランド「加藤牧場牛」として販売する6次産業化にも取り組んでいる。

・受賞者の特色

(1) 飼料の自給率向上によるコスト低減と繁殖・肥育一貫経営の大規模化

耕種農家からのわらの収量に応じて繁殖牛を増頭し、肥育牛と繁殖牛に与える粗飼料は100%地元産である。豆腐工場から無償調達した「おから」を配合飼料と混ぜて発酵させたものを粗飼料と混合して給与し、規模拡大と低コスト化を実現している。

(2) 周辺地域の耕種農家と連携した資源循環型農業の実践

地域の耕種農家と連携して粗飼料とするわらを収集し、その対価として堆肥を散布還元している。地力のない水田には堆肥の散布量を増やして化学肥料に頼らずに米の収穫量も上がり、双方のコスト削減や環境負荷の低減につなげている。

(3) 健康な牛づくりと消費者ニーズへの対応

「牛に優しい」は美味しい牛を育てるという信念をもって、ストレスを受けない飼養管理をしている。消費者の意見を取り入れ、肥育牛には独自で開発した栄養バランスの良い配合割合を給与して牛本来の能力による牛肉生産を行い、結果的に肥育期間が短く収益を上げている。

(4) 作業の効率化・省力化と個体管理

一連の作業のマニュアル化、数値化、機械化できる作業はほぼ機械化し、空いた時間で牛の状態を1頭ごとにきめ細かく観察し事故率を減らしている。

(5) 近隣の住宅団地と共存する畜産経営

臭気、子牛の鳴き声（騒音）、ハエ発生防除などの環境対策に取り組み、牧場から数100mの距離にある大規模な新興住宅団地と共存できる経営を行っている。

・普及性と今後の発展方向

良質堆肥とわらの交換による粗飼料の安定確保を基本に大規模経営を展開し、産業廃棄物の「おから」の飼料化による低コスト化と環境対策を講じ、消費者の声も取り入れたこの肉用牛一貫経営の普及性は極めて高いと考えられる。さらに、夫婦および後継者となる2人の息子との役割分担も明確であり、今後の発展が期待される。